【災害ボランティア出張報告】

リハビリテーション部　理学療法士　秋吉亜希子

今回、日本理学療法士協会の要請により災害ボランティアに参加しました。

期間：平成２３年７月９日（土）～７月１６日（土）
活動場所：宮城県本吉郡南三陸町
宿泊場所：宮城県介護研修センター（宮城県大崎市）
支援団体：日本理学療法士協会、宮城県理学療法士会、宮城県リハビリテーション支援センター等

目的：災害リハビリテーション支援は、宮城県における被災地域において、必要なリハビリテーション知識の提供や具体的な実地指導等を通して、被災者の廃用症候群（生活不活発病）を予防し、また被災後、身体機能が低下した者への回復支援を目的とする。

方針：災害リハビリテーション支援は県の要請の元、長期的な視点に立ち、元来存在する活動地域の医療や介護のシステムへスムーズな受け渡しをするよう被災者や関連する方々・団体と連携し、またお互いを尊重し合いながら実施していく。個々が「やりたい」活動をすることなく「求められている活動を行うよう、また１週間という派遣期間でなく、継続性を重視するため、現地では責任者の指揮の下での活動を行う。

活動内容：

7/9（土）	宮城県仙台市にて宮城県理学療法士協会スタッフ、先行班との引き継ぎ、申し送り。宿舎への移動。
7/10（日）	AM：南三陸町の視察、ボランティア活動場所の確認 PM：一般のボランティアに参加（避難所での支援物資の仕分け）
7/11（月）	南三陸町での災害ボランティアの実施。 AM　：県職員より現在の状況の報告と今週の活動予定の引き継ぎ実施。 PM　：歌津地区での在宅３件に対し身体状況の確認、 及び今後の介護サービスの確認実施。避難所にてマッサージのボランティアを実施。 ※　介護サービスが再開されているケースを県職員に報告した
7/12（火）	AM：志津川地区にて福祉用具の使用状況、歩行状況の確認１件。 介護サービス、装具の使用状況の確認１件等の災害リハビリ支援活動実施。 PM：志津川入谷地区にて歩行状況、介護サービスの確認１件、 ADL と介護サービスの確認１件等の同支援活動実施。
7/13（水）	AM：歌津地区避難所にて歩行状態と今後のサービスについての確認１件、 ケアマネージャー同行し歩行補助具の確認等の災害リハビリ支援活動実施。 PM：　歌津地区にて身体機能、介護サービスの確認。気仙沼市の視察。 県職員に訪問先からの要望を伝達等の同支援活動実施。

7/14（木）	AM： 志津川地区避難所にて ADL の確認と自主トレーニング方法の 確認 1 件等の災害リハビリ支援活動実施。 PM： 入院、外出等で不在の為、介入できない場合あり。
7/15（金）	AM： 志津川地区仮設住宅にて環境調整とトイレ動作の確認、 避難所にて自主トレーニング方法、装具の使用状況の確認、 志津川戸倉地区にて基本動作、介護サービスの確認及び 身体機能の確認各 1 件等の災害リハビリ支援活動実施。 PM：志津川入谷地区にて訪問するが不在。県職員に情報伝達、報告。
7/16（土）	宮城県仙台市にて宮城県理学療法士協会スタッフ、後続班との引き継ぎ、申し送り。

町の防災庁舎

町中心部

公立志津川病院

チリ津波到達高さ（2.4m）

沿岸部の被災地

仮設の公立志津川病院

志津川中学校から見た南三陸町中心部

仮設住宅（バリアフリー）

仮設住宅　玄関

高台から見た南三陸町歌津地区

南三陸町災害ボランティアセンター

避難所物資倉庫

感想：平成２３年３月１１日に起きた東日本大震災が起こり、私は休日であったため、テレビでの映像を見て驚愕し、震えとともにその後の報道を見るたびに、何か自分ができることがないかと考えていました。今回日本理学療法士協会の要請により、希望していた災害ボランティアに行く機会を得ました。ボランティア派遣までは報道での映像や新聞での記事を多く目にしていたため、その場に応じて臨機応変に対応できるか、被災者にどういった言葉をかけていいか不安でいっぱいでした。

ボランティア２日目に南三陸町を訪問し、山の方まで流れてきた瓦礫、津波で変色した木々、瓦礫と津波で流された役場や線路、図書館、コンビニなどがなくなった街並みを見た瞬間、津波の恐怖を感じ言葉を失いました。午後は被災地の状況をより知りたいと思い、災害ボランティアセンターに行き一般のボランティアに参加しました。内容は避難所での支援物資の仕分けでした。支援物資は食糧、衣料品、薬品等がありました。主に衣料品の仕分けをしましたが、サイズを分けたり、男女や子供用を分けたりするのも大変で私達が送った物資が、ボランティアや被災者の手に届き、このような形で渡されるという現実を知りました。また避難所を統括しているスタッフ（その方も被災者なのですが）より不必要なものや支援物資が常に送られてくるということで仕分けに時間を要すること、被災者が物資をもらうことに依存し自立支援を妨げていることを知りました。

ボランティア３日目より理学療法士として県職員の指示の元、高齢者や要介護者の方の自宅や避難所に伺い、身体状況の確認、歩行状態の確認、福祉用具の選定等を実施しました。訪問する対象は震災直後に地域の医師や介護支援事業者等の情報で選定された高齢者や要介護者でした。訪問した場所では家が半壊の状態で生活している人、ハエが飛び交う不衛生で段差の多い避難所で生活する人、環境の整った仮設住宅で生活する人といろいろな環境で生活している方と接しました。家族や家を失った人も多く、どういう風に声かけしていいのか迷いながら、訪問しました。訪問した方やそのご家族からは県外から多くのスタッフがボランティアに来ていることに感謝され、リハビリテーションスタッフが訪問することで身体状況を把握したり、歩行を確認したりすることで安心したという意見や今後の介護サービスに対する不安があるようでした。実際、震災後南三陸町のヘルパーステーションは経営困難なため従業員が全員解雇になっていたり、通所リハビリの施設が再開されずサービスが利用できない状態になっていたりしました。元々医療や介護サービスが十分提供されている地域ではなかったが、震災後そのサービスが途切れ、また道路が寸断されたため孤立状態になった高齢者、要介護者が多かったことがわかりました。当院では急性期から介護サービスまで充実しているが、このような未発達の地域では、現在のボランティアが去った後それを支援することは困難であり、過剰な情報提供やボランティアを提供することがかえって混乱を招くと聞いていたのでそれを助長しないように心がけました。

７月中旬から８月にかけて南三陸町の通所系のサービスは徐々に再開されることとなり、私達のグループで南三陸町でのボランティアは最後となったのですが、私達の行った訪問ではそれまで行ったスタッフへの感謝の言葉が多く、震災後から継続的に協会として活動してきた成果を感じました。

最後に実際に被災地に行かせていただいて、多くのことを知り、感じ、生きていることの大切さ、仕事があり家族がいることの大切さを感じました。今後私個人として具体的には何ができるかわかりませんが、被災地で職を失った人、家族を失った人に少しでも貢献できるように考えていきたいと思います。そして復興する南三陸町をまた必ず訪れたいと思っています。